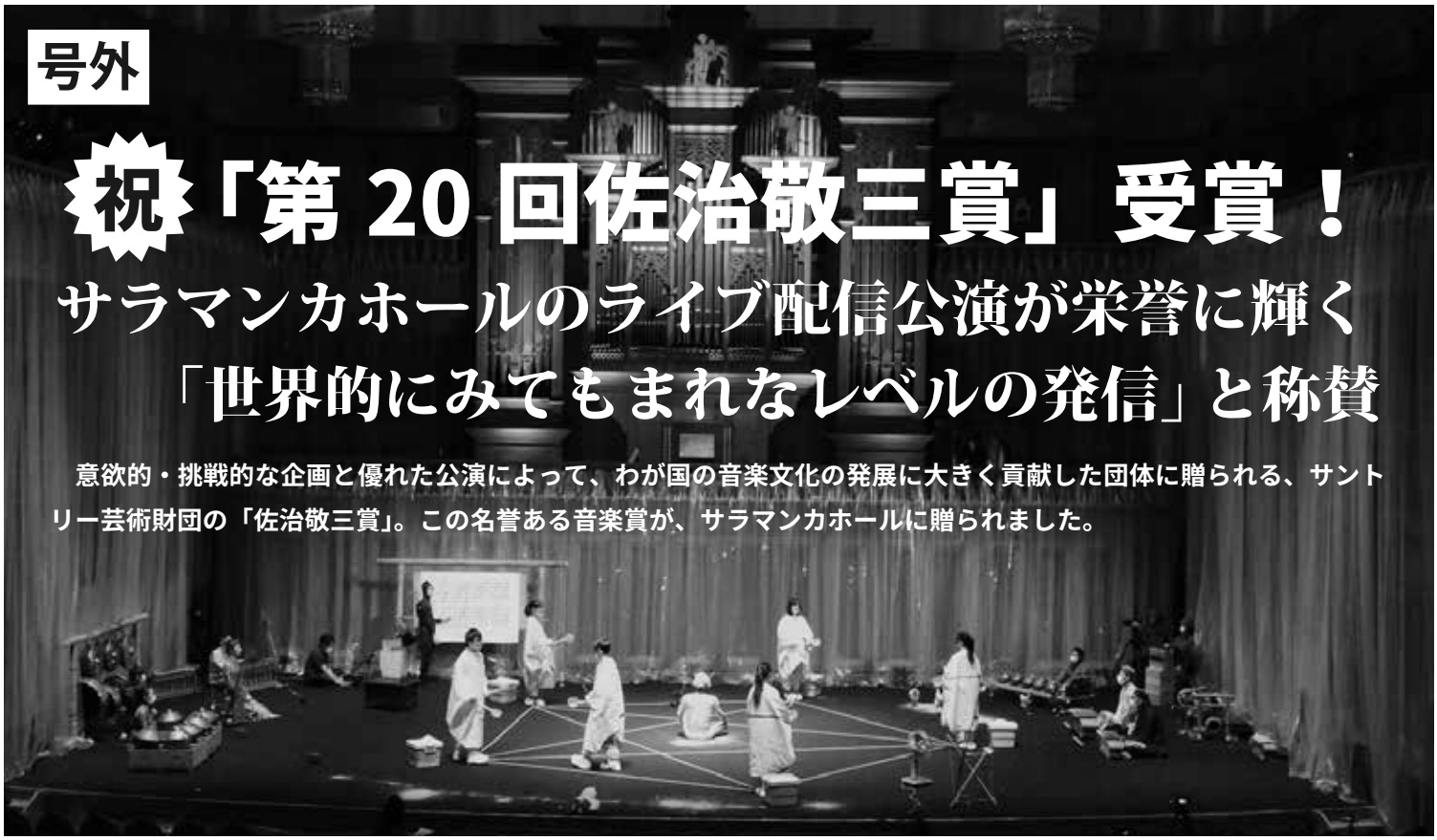
号外

祝「第 20 回佐治敬三賞」受賞！

サラマンカホールのライブ配信公演が栄誉に輝く「世界的にみてもまれなレベルの発信」と称賛

意欲的・挑戦的な企画と優れた公演によって、わが国の音楽文化の発展に大きく貢献した団体に贈られる、サントリー芸術財団の「佐治敬三賞」。この名誉ある音楽賞が、サラマンカホールに贈られました。



受賞公演：ぎふ未来音楽展 2020 三輪眞弘祭 ―清められた夜―

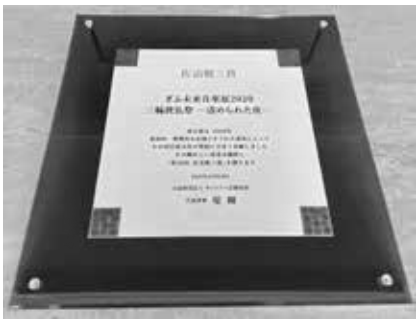
▶贈賞式に出席

11 月 19 日（金）、サントリーホール（東京都港区）で開催された贈賞式で、サントリー芸術財団の堤剛代表理事より嘉根礼子支配人が代表で表彰を受けました。音楽ホールが賞を頂ける機会は多くありません。この栄誉を励みに、サラマンカホールはこれからも『音楽から未来を考える』企画を続けてまいりたいと思います。

© サントリー芸術財団

▶公演を終えて

昨年、コロナウィルス蔓延のニュースが出始めたかなり早い段階で、「無観客／ライブ配信」の開催方針を決めました。そして、これまでもサラマンカホールと協働して「未来の音楽」を考え続けてきた作曲家・三輪眞弘氏（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 教授）の想いを共有し、実現に向けて動き出しました。今まで当たり前だったはずの、お客様に生の音楽公演を聴いて頂くことが出来なくなった状況に対する憤り、もどかしさ、音楽の未来を考えられなくなっているという皮肉は、三輪氏にとっても私たち音楽ホールにとっても、同じく危機的状況でした。



ホワイエで展示中の賞状

2020 年夏、ホール業界が陥った「音楽の終わりの終わり」とも呼ぶべき特殊な状況を、「音楽による音楽のためのお通夜」としてオンライン上から問い直すこの企画。映像監督・前田真二郎氏による精細なモノクロ映像、3 時間の配信の核となったメイン作品「鶏たちのための五芒星」で中央のダンサーにかけ続けられていた聖なる白い粉、か弱き存在の象徴として舞台上を歩き回る生きた鶏、祭壇に見立てられ画面中央に君臨するサラマンカホールの象徴・パイプオルガン…。一見風変りとも思われかねないこれらの設定はどれも全て、音楽の終焉という状況を鎮魂させ、未来の音楽の新しい可能性を模索するものの一つとして具現化するために必要な仕掛けでした。

音楽が社会の中でどのように生き延びていくかを考える上で、今回のレアな公演コンセプトとその実現が審査員からは、「コロナ禍という状況を真正面から引き受けた、世界的に見てもまれなレベルの発信となった。そのチャレンジ精神と達成に対して佐治敬三賞を贈る。」と評価されたことを、主催者として嬉しく思います。

現在、12 分にまとめたダイジェスト映像をサラマンカホール HP にアップしております。是非ご覧下さい。

ダイジェスト映像はコチラから☞